

県中教研

特別支援教育部会だより

第 36 号

発行日 令和3年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 杉本 和博
題 字 金山 泰仁 先生

「当たり前」を広げ、「できた」を増やそう

指導主事 荒瀬 典子

本年度は、コロナと共に始まり、コロナに翻弄された一年でした。研究大会は感染防止対策に配慮しての開催のため、制約が多い中での授業公開となりましたが、子供たちが真剣に学ぶ素敵な姿を見せていただきました。その場が本年度初めての対面での研修ということもあり、部会協議では日頃の悩みや指導の在り方等について、活発に話し合われました。特別支援教育で大切にしなければならないことについて、改めて考えさせられた時間でした。

次年度から、新学習指導要領が全面实施となります。今回の改訂では、特別支援教育に関する記述が大幅に増えました。これは、一人一人をより大切に、というメッセージのように思えます。通級による指導に関しては、「自立活動の内容を参考とし、具体的な目標や内容を定め、指導を行うものとする。」という規定が新たに加わりました。自立活動は6区分27項目で示され、一人一人の実態に基づき、必要な項目を選定して取り扱います。

「当たり前です！」という声が聞こえてきそうですが、これらのことを教職員全員が共通理解していることが大切です。そして、学級担任や教科指導を担当する教員と通級担当教員が連携をとり、通級指導の効果が通常の学級においても波及していくことが重要です。通級による指導を受ける子供が抱える困難さは、一人一人違います。丁寧な実態把握を基に、個に応じた指導計画を立て、これまで「できない」と困っていたことが「できた」に変わるよう、そして通級での学びが自分の生活をよりよくしているという実感をもたせられるよう、連携を図っていききたいものです。

特別支援教育に関わる先生方が、この「当たり前」を学校全体に広げ、子供たちの「できた」を増やしていくための体制づくりの中核となることを願っています。

(東部教育事務所)

コロナ禍の研究推進

部長 杉本 和博

今年度は、「特別な支援を必要とする生徒の個性や能力を伸ばし、自立と社会参加を推進するための指導はどうあればよいか。」という研究主題に、「生徒の教育的ニーズに応じた学習過程の工夫」という副題を設定し研究を進めてきた。

研究主題の解明にあたり第64回研究大会では、「生徒の教育的ニーズに応じた学習過程の工夫」を「教材・教具と指導方法の工夫」という視点からとらえ、東西両地区で授業を公開した。

東部地区では、富山市立呉羽中学校で1～3年生の作業学習の授業を公開した。題材名を「シューズキーパーを作ろう」とし、1学期から栽培してきたラベンダーを使い、贈り物の制作を行った。この題材では、「他者（教師や友達）と関わり合いながら、主体的に活動すること」を促すため、支援環境づくりと学習過程の工夫の2点に重点が置かれた。参加者からは、「手順カード（支援ツール）により、生徒一人一人へ細やかな支援がなされていた」という感想が寄せられた。

また、西部地区では、高岡市立志貴野中学校で1・2年生の理科の授業を公開した。題材名を「動物の生活と生物の変遷」とし、授業では、教科書の他に1人1台のiPadを使用し、それぞれの生徒が分担する動物の特徴を調べた。iPadの文字読み上げ機能や音声入力機能を利用することで、読み書きが苦手な生徒への大きな支援となった。参加者からは、「iPadの活用により生徒は主体的で、個に応じた学習に取り組むことができていた」という感想が寄せられた。

コロナ禍のこの1年を振り返ってみると、県内各郡市における活動は、大きな変更を求められた。例えば、昨年度まで長く続けてきた地域の交流活動は、規模を縮小したり中止したりせざるを得ない状況になった。各郡市で継続してきたそれぞれの活動には大きな教育的意義があり、その成果を享受できなかった今年の生徒たちには、できるだけ早期のコロナ収束を実現させ、これまで以上に実り多い指導を実施していきたいものである。

(富・速星中)

第64回 富山県中学校教育課程研究大会

東部地区（富山市立呉羽中学校）
令和2年10月20日（火）

西部地区（高岡市立志貴野中学校）
令和2年10月20日（火）

研究授業は、知的障害特別支援学級（1年生男子1名、女子1名、2年生男子2名、3年生男子3名）で、山田將代教諭による作業学習「シューズキーパーを作ろう」が行われた。授業は、事前に3台のカメラで、教師の様子、生徒の様子、授業の様子を分担して撮影したものを、当日、参観者が協議会場で視聴した。

授業内容は、1学期に「園芸」の学習で収穫したラベンダーの花を使って、お世話になった方に贈る「シューズキーパー」を製作する作業である。

「他者（教師や友達）と関わりながら、主体的に活動すること」を促すために、写真と文字で表記した手順カードやお助け



カード等の支援ツールを効果的に用いて、生徒一人一人への細やかな支援がされていた。そのため、生徒は最後まで目標をもって、集中して作業に取り組んでいた。

部会協議①では、作業学習についての協議が行われ、活動の目的と最終的なゴールを決めて授業を計画することの重要性、丁寧さの基準や技術面での正確さ等について学んだ。

部会協議②では、部員が日頃悩んでいる内容ごとにグループに分かれて話し合った。コロナ禍のため、今年度は部会で研修する機会が乏しく、実りある研修となった。

荒瀬典子指導主事（東部教育事務所）からは、

- ・生徒一人一人の強みを生かしたチーム分けや支援ツールの効果的な活用により、生徒が黙々と集中して作業に取り組む姿が見られた。温かく見守る教師の姿勢がよかった。
- ・作業学習は、各教科の学習につながり、今後の生き方にも生かせる学習である。人の役に立つ、相手が喜んでくれるという経験は自己有用感を高め、生徒の働く意欲を高めることができる。
- ・特別支援学級では、生徒が意欲をもって活動し、成就感をもてるようにするために、実態を把握し、個々の教育的ニーズに応じた学習過程を工夫して適切な指導・支援を行うことが大切である。

などの助言をいただいた。

横野 誠（富・興南中）

研究授業は、知的障害特別支援学級（1年生女子1名、2年生男子3名、女子1名）で、長草裕志教諭による理科「動物の生活と生物の変遷」についての授業が公開された。公開授業は、教室に3台のカメラを設置し、参観者は別室でその授業の様子を視聴した。新学習指導要領に向けての移行措置により、複式ではなく1・2年生ともに同じ内容を学習することができた。

授業では、教科書やiPadを用いて自分の担当する動物の特徴を調べ、その特徴から5種類の動物（魚類・両生類・ハチュウ類・鳥類・ホニュウ類）に分類する学習であった。文字の読み書きが苦手な生徒の実態に合わせ、iPadの音声入力機能や文字の読み上げ機能を使うなど、ICT機器を活用した支援が行われた。また、生徒は、自分で調べ方を選択して学習を進めることができ、意欲的に調べ学習を行うことができ、一人一人の個に応じた授業であった。

横山恵指導主事（西部教育事務所）からは、

- ・部会協議①では授業について、iPadで調べるといふ学習内容が生徒の実態に合い、探求する姿が見られた。学習指導要領には、「生徒の障害の状態に応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする」とある。本時では、書くことに困難がある生徒に対して合理的配慮としての支援が行われていた。継続的に必要であるならば、個別的教育支援計画に明記し長期的な視点で支援していくことも考えられる。
- ・部会協議②では実践事例集について、「環境整備」「教材教具の工夫」「授業内容や方法の工夫」「ICT機器の活用」「評価の工夫」「連携」「個別的教育支援計画」等、個の学びを支える工夫が伝わってきた。事例集を通してつながったネットワークや小学校との連携により、長期的な視点を踏まえて生徒のために支援してほしい。

などの助言、励ましの言葉をいただいた。

奥 志津子
（射・小杉南中）

